

ステップ・バイ・ステップ

水無月 戒

秋の高い空は澄んだ青に染まっている。昼下がりの傾きかけた太陽は、イワシ雲の向こうで柔らかに輝いている。サン・マルコ広場は穏やかな光に包まれ、秋枯れの風が吹き抜けていた。

気候はすっかり涼しくなり、朝夕は肌寒い日もある。街路樹は緑を失い、もう少しすると枯葉の絨毯（じゅうたん）ができることもあるだろう。

こんな日は、無性に温もりが恋しくなる。それは過ぎ去った夏への思い残しだろうか。日が明るいほどに、その割に感じる風が冷たいほどに、その思いは強くなっていく。

「おいしー」

「でっかいホクホクです」

その渴望を満たすために、きつと人は、

「やっぱり秋といえばおイモよねー」

焼きイモを欲する。

「ぶいぶいにゅっ」

「あつたかくて甘くて黄金（こがね）色で——まるで夏の太陽のタイムカプセルみたい」

「恥ずかしいセリフ禁止ッ!!」

三人は会話しながらも、はふはふと湯気立つ石焼きイモを味わっていた。

灯里、藍華、アリスの水先案内人（ウンディーネ）三人娘とアリア社長——火星猫

——は合同練習を終え、解散前に焼きイモで一息ついているところだった。

水面を渡る風も冷たくなり、秋の到来をひしひしと感させられる。しかし何時間もその風に当たってれば、たとえ冬服に着替えてもその身は凍えてしまう。その冷え切った身体を、黄金色の焼きイモは内側からほっこりほくほくに暖めてくれる。その大地の恵みは、三人と一匹を優しく包み込んでくれた。

「ところで藍華先輩」

「なあに、後輩ちゃん」

「アルさんとはその後どうなんですか？」

——不意に訪れる沈黙。

凍りつく時間。

広場にあふれる喧騒を異質なもののへ変えるほどの静寂。

耐え難い空気が一瞬で辺りを支配した。

その深海のような圧力の中、灯里はまったく身動きが取れなくなった。神経が締め付けられ、水のように空気が肺にのしかかる。振り払うべく腕を動かす、笑い声を上げようとすが、蟬のように硬くまとわり付く空気はそれら一切を許してくれない。

それは火星猫であるアリア社長も同様だ。内側からキリキリと締め付けてくる無言の圧力に耐えかね、彼は思わずその前足でぶにぶにほっぺを挟み込み、息を呑んでいる。あふれる弾力性で柔らかに歪む頬がなんとも場違いだが、本人は必死に耐えているのだった。

いったいどれだけそんな時間が続いたのだろうか。

灯里の左隣に腰を下ろしたアリスは仏頂面のまま、水平線を眺めながら藍華の返答を待っている。

灯里の右隣に腰を落ち着けている藍華は焼きイモの温かさのためにため息を付いたまま、目を細めて空を見上げて固まっている。

時間が経っても、アリア社長が自分の頬を抱きしめる力が増すばかり。灯里の顔を滴（したた）る脂汗の量が増していくばかり。

——そして何かが破裂する寸前、時は動き出した。

「でもやっぱり飲み物も欲しいわね」

「藍華先輩？」

「フロリアンで何か買って来ようか？」

そう言っただけで立ち上がろうとする藍華。

「藍華先輩」

練習でも見せたことのないほど語気が強まっていくアリス。

「みんなカフエラツテでいい？」

その二人の間で怯えに身体を震わす灯里。

「藍華先輩！」

「だあー、うるさいわね！ 何がどうなるって言うのよ！」

アリスのしつこい圧力を振り払うべく、藍華は勢い任せに叫んだ。

「お月見の夜の台無しになったものです」

「ぐっ!？」

しかしびしやりと出鼻をくじき、それを許さないアリス。

見事に藍華は返し言葉が思い付かず、赤い顔のまま固まるしかなかった。

そんな彼女の様子に、アリスは深々と溜息を吐いた。

「何も、あれからアルさんとお会いしてないわけでもないですよね？」

「そ、そりやあ何回か会ってるけど……」